

東京研修の1番最初のイベントとなったディレクトフォー。この機会は、参加者全員の将来設計において、間違いなく大きな影響を与えただろう。まず、笹川平和財団の田中伸男様のお話は、生徒全員に大きなインパクトを与えた。私は、田中様のお話から3つのポイントをくみ取った。

一つ目は、自分の経歴、また、IEAがどのような組織であるかを初めに丁寧に説明していたことである。私自身、IEAという組織の存在は知っていたが、具体的にどのような活動をしていて、地球上のどんな役割を担っているのか、という事はわかっていなかった。しかし、田中様が、初めに、IEAの役割と活動内容を説明してくださったので、その後の話題展開に、すぐに着いて行くことができた。二つ目は、現代社会の状況に加え、これから先の未来の状況までを予測し、図表化することで、現在の状況が危機的であるということや、将来の日本がどんな状況に陥るかを、聞き手に伝えているところである。具体的には、中東の石油輸出の推移を2035年まで表すことで、中東産石油の約90%がアジアに輸出されるということを表したり、各国の二酸化炭素排出量の推移を2020年まで計算して、技術革新さえあれば、減少させることが可能であるということを知りやすく伝えていた。また、田中様は更に、アメリカ、中国やインド、ヨーロッパ、東アジアとロシアなどの各地域の現在とこれからの二酸化炭素排出状況を説明し、根拠も具体的に説明していた。三つ目は、これからの日本や世界の課題を、明確に説明しているところである。日本の課題は、やはり、原子力発電の問題であろう。私自身、震災を経験し、原発に対し、否定的な意見を持っていた。しかし、田中様の「日本は厳しい規制をつくり、徐々に原発を再稼動していかなければならない。使用済み燃料などの課題もあるが、日本の優れた技術によりそれらは解決できる。」という発言を聞き、考えを改め直した。また、「アメリカは燃費規制による省エネ化でエネルギー自立を成功させたが、電気自動車の普及により石油の時代が終わってしまうかもしれない、という課題を抱えている。」という事は、初めて知った。田中様は最後に、「国際機関の役割は、首脳に提言をし、首脳を支えることである。」との発言をした。私は、首脳の陰で世界を動かす国際機関の役割は、非常にかっこよく、また、世界にとって必要不可欠であるということを知り、改めて理解した。

続いて、グループセッションが行われた。私達の班は前川様、守屋様、大久保様、吉田様の四名のお話を聞くことができた。

前川様は、貧しい国々の人材育成を助ける仕事を7年間した後、笹川平和財団で「平和と海洋」についての調査と仕事を行っている方だった。お話の中で、最も印象的だったのは、「陸よりも、海の生物は知られていないが、海の生物は人間にとって不可欠であり、また、海には多くの生産資源がある。生態系を傷つけずに、海をどう使い、どう守っていくかが大切である。」という発言だ。私は環境問題は、陸上にばかり目を向けがちだったので、これからは海のことも深く考え、未来の海をよりよくしていこうと思った。

守屋様は、キューピーで新商品開発に関する仕事に携わり、その後、キューピーの中国進出に大きく貢献した方である。守屋さんは「海外で仕事をする際、1番重要なのは言語力ではなく、人間力だ。だから、信頼されるような人間になりなさい。壁にぶつかっても逃げずに、壁の前でうろちょろしていれば、誰かが必ず見ている。」とおっしゃった。この言葉を、将来壁にぶつかった時に思い出し、常日頃から、信頼される人間になれるよう、努めていきたい。

大久保様は、笹川平和財団で国際協力に関するプロジェクトを8から10個担当している方だ。具体的には、奨学金に関するプロジェクトや、フィリピン残留孤児、日系ブラジル人に関するプロジェクトなどである。大久保様は、「事前の勉強と、周りの助けがあるので、何とか乗り切っている。あとは、反省と改善点を常に記録していれば、やりながら学んでいけるものだ。」とおっしゃっていた。年齢が若いのにもかかわらず、多数のプロジェクトを受け持つ方のお話を聞くことができたのは、とても良い経験であった。

吉田様は、海外の企業での仕事の経験があり、日本の企業側と海外の企業側の両方に立ったことがある方だった。吉田様は、「世界で求められる能力は、第一に自分のアイデンティティを持つこと、つまり、自分の国についてよく学ぶこと。第二に人間性、個性やリーダーシップ、責任感や誠実さなど。第三に異文化交流、そ

して第四が英語である。」とおっしゃった。また、

「To be international, benational」ともおっしゃっていた。つまり、良い日本人であれば、世界で活躍できる、という事である。私は、将来のためにも、これから日本のことを、もっと熱心に勉強する必要があると感じた。

このイベント全体を通して、私は自分の将来設計において、新たな選択肢の一つや、将来の可能性を得ることができた。最後の若林先生の「このイベントが良かったと思う人？」との質問に対する生徒全員の反応を見ても、このイベントは生徒にとって大きな収穫のある、最高の機会となったと、私は感じる。将来どんな職に就こうと、今回学んだことは忘れずに、頑張っていきたい。

1日目の午後、私達の班は、企業大学訪問で一橋大学経済研究所の北村行伸教授を訪問した。一橋大学は、国立駅から徒歩5分ほどの距離にあり、自然に囲まれた、まるで森の中にあるような、美しい大学だった。都心から離れているため、落ち着いた雰囲気があり、研究に専念できそうであった。あまりの広さに、敷地内で少し迷ってしまったが、なんとか研究所にたどり着くことができた。

北村教授をはじめとする研究所の方々には、私達をとて歓迎してくださった。北村教授からは、非常にタメになるお話を伺うことができた。私は特に大きく2つの話が印象に残っている。

1つ目は、子供の貧困についてだ。北村教授の話では、「子供への投資で最も重要なのは、生後3年間であり、また、10歳までの間に身体的、感情的なものがほぼできあがってしまう。だからこの期間に親が子に十分な栄養を与え、教育を施し、刺激を与えるべきなのだ。」とのことだった。しかし、今の若者にこの事を知っている人は少なく、子供の貧困がこれから拡大してしまう恐れがあるかもしれないらしい。「幼少期にかかるコストは成長してからかかるコストよりも格段に少なく済むのに、それをかけることができない親もいる。そのような家族に対して、国は政策を行うべきである。」とも、北村教授はおっしゃっていた。私は、今、自分が仙台二高という立派な高校に進学できたことが、幼少期に私に大きな投資をしてくれた両親のおかげであるということを改めて実感した。また、自分が将来子供を授かった時にも、立派な大人に成長できるように、幼少期のお金や時間の投資を惜しまずにしようと思った。

2つ目は、母子家庭や父子家庭の貧困率が日本は高いということについてだ。北村教授の話では、母子家庭や父子家庭の親は非正規労働者が多く、また、若い時期に離婚をしてしまい、十分なお金を稼ぐことが難しいのが理由だとのことだ。「これは、日本の制度上にある不備であるから、法律を見直し、強制力をつけ、フランスやアメリカのようにしっかりした制度を設けるべきだ。」と、教授はおっしゃった。私は、平等を掲げている日本社会でもこんなことが起きているという事実に衝撃を受け、また、いつかこのことが解消されてほしいと思った。

北村教授は、経済学以外にも、生物学や政治学などの豊富な知識を持っており、非常に偉大な方だった。このような素晴らしい教授のお話を聞くことができる機会は、もう二度とないと思うので、とても貴重で、ありがたい経験をさせていただいた事を、私はとても感謝している。